

日本学校教育相談学会

The Japanese Association of School Counseling and Guidance

会報

JASCG

第51号

- 1◎巻頭言
- 2◎第27回中央研修会の趣旨
- 3◎研修委員会//調査研究委員会//認定委員会
- 4◎学会誌作成委員会//広報委員会//先輩に聞く
- 5◎先輩に聞く//【静岡県支部】一支部活動報告一
- 6◎【静岡県支部】一支部活動報告一
//第28回岡山大会報告
- 7◎第28回岡山大会報告
//震災被災者(地)支援委員会報告
- 8◎会長コーナー//事務局より//第51号編集後記

巻頭言

私と教育相談

—「問う、聴く、語る」という

かかわり方の意味 —

1970年代後半、私が中学校の教師になった頃には、「教育相談」という言葉は、学校現場には馴染みがありませんでした。子どもたちの荒れ、校内暴力などに対して、「初めが肝心だからバシッといけ」と先輩に叱咤されて、学年の生徒指導担当として、頭髪服装点検にエネルギーの大半を使っていたような時期もありました。しかし、形を整えるために強く迫れば、それだけ子どもとの溝ができていくような状況のなかで悩みました。

1980年代半ばには、校内暴力は一定の沈静化をしていきましたが、いじめや不登校が増加していきました。そんな時期に、今までの管理的な生徒指導では対応できない荒れる子どもや自分を語ってくれない不登校の子どもなどと多く出会いました。どうしたら、この子どもたちと対話のできる関係になれるのか、荒れやいじめや不登校といった言動を通して、子どもは誰にどんなSOSを発信しているのかについてこだわるようになり、実践を通して教育相談への関心が広がっていきました。



近畿・石川ブロック代表、京都府支部理事長

春日井 敏之

現在、大学に籍を移して16年になりますが、教育相談を軸にした生徒指導の重要性を強調したいのです。そのためには、問う、聴く、語ることを大切にしたい子どもとの関係づくりが必要です。

第一に、「問う」というかかわり方には、三つの意味があります。一つには、問い詰めるのではなく、「どうしたんや」と気になる子どもに問いかけること。「あなたのことをいつも気にしているよ」というメッセージは伝わります。二つには、「子どもの言動の意味を自らに問う」という子ども理解の姿勢をもつこと。三つには、一人でわからないときには、「周辺の同僚などと子どもの言動の意味を問いつつ」というネットワーク支援の姿勢をもつことです。

第二に、「聴く」というかかわり方で最も大切なことは、「負の感情を聴き取る」ことです。それが、子どもの不安やストレス、葛藤などを読み拓き、信頼関係を築いていく扉になることが多いのです。「腹が立つ、むかつく、しんどい、辛い、悲しい」といった感情を聴き届けてくれる他者と出会うことで、子どもは課題と冷静に向き合ったり、一区切りをつけたりできるのではないのでしょうか。教師や親は解決請負人になるのではなく、限界をわきまえながら、一緒に考えるというプロセスが大切なのです。

第三に、「語る」というかかわり方で最も大切なことは、「親や教師が自分を語る」ことです。「先生もうれしい」「お父さんもうれしい」「お母さんもうれしい」というひとことです。同時に、子どもと同じような時期に、どんな失敗をしてきたのか、その時誰に助けてもらい、どうしので現在に至ったのかなどをリアルに語ることです。プロセス抜きの成功談は、大人の自慢話にしかありません。これは、生き方を考え合うキャリア教育の中軸にもなるテーマです。教師も一人の人間として、自分の人生を語ることです。

第27回中央研修会の趣旨

平成29年1月7日(土)～8日(日)東京・代々木の国立オリンピック青少年総合センターで、第27回中央研修会を開催致します。研修の案内と申し込み方法は別紙に詳細があります。ご参照の上、お誘いあってお申し込み下さい。会報では研修会全体の趣旨説明をさせていただきます。

(1)「プレ講座」について

昨年の中央研修会から「プレ講座」を設定致しました。教育相談の世界には、子どもたちの適応・学習・進路・健康をめぐる、様々な教育課題があり、子どもたち支援の為に数限りないアプローチがあります。教育の周辺領域を含め、多岐に渡るのみならず、日々新しい技法が開発され、また海外からも効果的なプログラムが持ち込まれています。年に2回、研修委員会主管の研修がありますが、少しでも多くの方に、少しでも多くの学びの機会を提供したいというのが「プレ講座」設定の趣旨です。今年度は「感覚統合療法入門」「動機付け面接実践入門」「ラフターヨガ入門」を予定しています。

(2)「シンポジウム」について

シンポジウムと個別研修の組み合わせで、中央研

修会の構成は定着しつつあります。シンポジウムは教育や教育相談の重要なトピックをテーマとして取り上げ、会員が可能な限り参加する形で実施したいと考えています。研修委員会が目指しているのは、いわば参加型のシンポジウムです。話題提供を受けての協同での討議の折り、あるいはフロアからの発言の機会に是非積極的にご参加頂きたいと思えます。

今年のシンポジウムのテーマは「合理的配慮の実現～学校教育相談の真価が問われる～」です。国立特別支援教育総合研究所の涌井恵先生に基調講演を頂き、3名のシンポジストの方から「共生社会の一員を育てる」(石橋瑞穂先生)「合理的配慮で進路を拓く」(浜崎美保先生)「アドボカシーと合意形成」(橋口亜希子先生)の観点から話題提供をして頂き、帝京大学の砥柄敬三先生に指定討論をして頂く予定です。

学校教育相談は、開発的、予防的な教育相談を重視してきました。特別支援教育も、当該の児童生徒への心理的支援以上に、集団の場における教育的支援の比重が重いのです。今年度、障害者差別解消法が施行され、「合理的配慮」の提供が求められています。その実現に当たっては、学びの多様性を前提にした学習が保障されているか(UDL)、本人の支援を求める表明があり、その合理的な範囲を合意形成する相談の力量があるか(アドボカシー)、周囲の児童生徒をどう育てていくか(共生社会の一員)、など、さまざまな課題があげられます。これらは、特別支援教育の問題のようでありながら、実は学校教育相談の成熟が問われる課題と同義です。

本シンポジウムでは、特別支援教育の視点から、合理的配慮を実現する営みを通して、学校教育相談の発展を展望したいと思います。

(3)「コース別講座」について

コース別講座は、多様な研修課題を7コース設定しています。特別支援教育関連からWISC-IVの実際を事例で学ぶ、相談の原点である聴く面接を精神科医の実践から学ぶ、これからの日本の教育を変えていくアクティブ・ラーニングとキャリア教育の接続を学ぶ、短期家族療法の教育臨床課題への活用、アドラー心理学からの学校教育相談へのアプローチ、子どものこころの成長を目指すフレンズ、学会員の研究レベルの向上を目指す論文の書き方講座、いずれも実績のある講師の先生方による研修会です。ふるってご参加下さい。

(文責：研修委員長 渡辺 正雄)

研修委員会

8月の岡山大会ワークショップを終え、研修委員会は、来年の第27回中央研修会（1月7日～8日・国立オリンピック青少年センター）と千葉大会ワークショップ（8月4日・神田外語大学）の準備に入っています。中央研修会は昨年同様にプレ講座3、シンポジウム「合理的配慮の実現～学校教育相談の真価が問われる～」、コース別講座7を予定しています。今回の会報に詳細が掲載されていますので、講座の講師の先生による案内などをご覧頂き、お仲間とお誘いあつてご参加下さい。千葉大会では7講座を予定しています。3月の会報で詳細な案内を掲載致しますので、よろしくお願い致します。

岡山大会のワークショップは、岡山市の「ピュアリティまきび」で実施致しました。会場の収容の関係で3コースを早々と締め切りましたが、166名の方に申し込み頂き、盛況のうちに終了致しました。研修会後のアンケートの評価も高く、満足度の高い大会になったと思います。研修委員会主催のラウンドテーブル「教育相談の定着を語り合う～小中高の現状から～」では、福岡教育大学の西山久子先生に話題提供・問題提起をして頂きました。約30名の方が参加し、小中高の各テーブルに分かれて活発に話し合いました。ラウンドテーブルは話題提供を受けて、参加者が議論し合う、学会のアクティブ・ラーニングです。様々な実践、多様な体験、多面的な意見の交換ができたと思います。

（文責：研修委員長 渡辺 正雄）

調査研究委員会

調査研究を進めていく委員を紹介します。以下の通りです。

＜調査研究委員＞

木村 正男（可児市立蘇南中学校）委員長
金子恵美子（埼玉純真短期大学）副委員長
村松 環（宮城県子ども総合センター）
磯野 清（神戸市立住吉中学校）
草野 剛（垂井町立表佐小学校）
鈴木 章乃（岡崎北高等学校）
森 俊郎（養老町立養北小学校）
小笠原 淳（岐阜大学教育学部附属小学校）
森 恵梨菜（海津市立日新中学校）

＜指導していただく先生方＞

相馬 誠一 先生（東京家政大学）
藤原 忠雄 先生（兵庫教育大学）
新井 肇 先生（兵庫教育大学）

＜調査協力＞

石巻市教育委員会
日本学校教育相談学会宮城県支部

現在、調査研究する内容を石巻市教育委員会や宮城県支部の皆さんと協議しながら調整しています。

（文責：調査研究委員長 木村 正男）



認定委員会

第28回岡山大会総会で承認された認定委員会の本年度予算に、基礎講座開催補助費63万円があります。これは学校カウンセラーの資格を取るのに必要な講座が少なく、資格を取りづらいという意見が多かったので、各県支部で基礎講座を開催していただけるよう補助していこうというものです。

今年の岡山大会から「新入会員増加対策委員会」が新設され、受付で「教育相談学会の輪を広げよう」と呼びかけていました。会員の輪を広げることは、学校カウンセラーの輪を広げることに繋がるものであると考えています。

国家資格としての公認心理師法案が可決され、一般社団法人日本スクールカウンセリング推進協議会は「ガイダンスカリキュラムによる成長促進型の教育相談を行える専門家」としてガイダンスカウンセラーの有用性を文科省をはじめ各方面にアピールしています。ガイダンスカウンセラーの基礎資格である学校カウンセラーの資格を取っていこうという気運が会員に広がっていくことを期待しています。

本年度の「学校カウンセラー・ガイダンスカウンセラー実践研究会」は、12月11日（日）に神戸で、栗原会長を講師に迎えて「学校教育相談のこれから～日本における包括的生徒指導～」というテーマで講演して頂く予定です。神戸と東京と隔年で実施される研究会です。今回は、参加しやすい関西方面の学校カウンセラー・ガイダンスカウンセラーの皆様への参加をお待ちしています。

（文責：認定委員長 青木 美穂子）

学会誌作成委員会

会員の皆様には、日頃、学会誌作成委員会の活動にご理解とご支援を賜りありがとうございます。

現在、学会誌『学校教育相談研究第27号』への投稿論文の審査を行っています。今年度の投稿論文数は8月末までで12本です。この後、10月末までで夏の全国大会で発表された先生が投稿されることになっていますので、最終的には15本くらいと思われます。

査読済の投稿論文は、12月の学会誌作成委員会にて掲載の判定をする予定です。その後、修正・校正を済ませ、発刊は例年通り来年の6月となります。近年、掲載に至る論文の数が減っていますので、より質の高い投稿論文が望まれます。

さて、学会誌作成委員会は、昨年度から、論文作成の講座を定期的で開催しています。時期は、1月の全国研修会と夏の全国大会で、1日のワークショップという形となります。今後も、このような研修を継続していきますので、論文作成にチャレンジしてみたいという方やよりよい論文に仕上げたいという方は、是非ご参加ください。

本学会は「学校教育相談の実践を通して研究・研修等を行う」ことを特徴としています。学校現場での実践を是非多くの会員の方がご投稿くださり、掲載されることで広く学会員に有益な情報提供となるよう願っております。

(文責：学会誌作成委員長 長坂 正文)

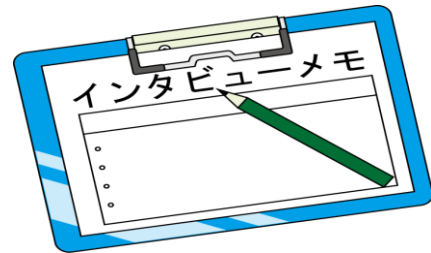
広報委員会

27年度より「先輩に聞く」シリーズを始めています。学会の創成期より活躍されてきた先輩から、「私と教育相談」をテーマに、広報委員等がインタビューするという企画です。今までの取組や思い、学会に期待することなどをお聞きし、そこから学ぼうというものです。

会報48号の第1回は、和井田節子前広報委員が小泉英一先生の業績をレポートしました。第2回は、加勇田修士前広報委員会委員長ご自身に書いていただきました。第3回は、今井五郎先生に山崎洋史先生（東京支部理事長）がインタビューをしました。第4回は、中野武房先生に小川正人広報委員がインタビューをしました。次回の第5回は、日野宣千先生に藤浪直紀広報委員がインタビューする予定です。

先輩の先生方の思いや今までの実践に触れるにつけ、とても勇気づけられるのは筆者だけではないと思います。今後も、ますます、内容が充実するよう広報委員会でも工夫努力する所存です。

(文責：広報委員長 梅川 康治)



先輩に聞く

「私と教育相談」

—中野武房先生にお話を伺って—

名誉会長 中野 武房

今回は、名誉会長の中野武房先生にお話を伺いました。中野先生と学校教育相談の出会いは、「素直に言うことを聞かず、特に反抗するでもない、斜めに構える生徒の存在」でした。「その子たちにどう接すればよいか」、中野先生が生徒指導部長に相談すると、「若さを生かし、積極的に生徒に接する態度は良い。しかし、もう少し生徒の気持ちを理解して、それに沿った指導が必要ではないか」と言われ、カウンセリング研修会への参加を勧められたそうです。

時代的には、私（小川正人広報委員）が高校生の時に中野先生が新採教員だと思います。当時を思い出すと、若い人は知らないと思いますが、「無気力」「無関心」「無感動」の三無主義という言葉が流行っていました。受験戦争と言われたこの時代に、世相を表す言葉として登場しました。

受験戦争で私（小川）の高校生活は灰色でした。さらに、私の心中を無視した担任の言葉によって、傷つきました。その当時の先生は、中野先生のような生徒側に立って、生徒の気持ちを理解して、それに寄り添う先生は少なかったと思います。気になる行動をとる生徒の存在に気付き、それに沿った指導を目指した中野先生には敬服致します。

学会発足の理由の一つに、地方ごとの研修が終わってさらに研修する場の設定ということが挙げられます。そのきっかけは中野先生によると、全国研究

所連盟（国研と略、国立教育研究政策研究所）にあるそうです。全国に教育研究所やセンターが220余箇所あり、それを束ねているのが国研です。国研の主催事業として都道府県教育研究所連盟傘下のものと、「生徒指導・教育相談の推進に関わる研究」が行われていました。

昭和58年～60年の3年間にわたる「生徒指導の推進に関する総合的研究」の取り組みは、初めて事務局が関東圏を離れ、中野先生が勤務する北海道立教育研究所が担うことになったそうです。そこに、学会創立に係わる小泉先生・今井先生（東京）、日野先生（栃木）、向後先生・大木先生（千葉）、金子先生（埼玉）甲斐先生（山梨）、高山先生（福岡）、長岡先生（愛知）等多くの先生方が参加しました。その研究会の報告書が、好評を得た『新しい生徒指導の視座』全国教育所連盟編（ぎょうせい 昭和61年）です。

そのような経過から、全国の教育相談研究所の知己を得て、カウンセリングの勉強をさせてもらうことができたそうです。そして、日本学校教育相談学会誕生の総会研究会（平成2年1990年2月山梨県石和観光ホテル）で、中野先生はシンポジストとして登壇しました。また、文部省（現文部科学省）発行の生徒指導（研究）資料作成にも参加しました。当時の文部省教科調査官は群馬県支部長の高橋哲夫先生でした。生徒指導資料15集 平成2年文部省『学校における教育相談の考え方・進め方』中学校・高等学校編作成にあたり、本学会から小泉先生・今井先生・大野先生とともに参加しました。

私（小川）が学会のある懇親会で、ある会員さんに「あなたにとって学会は、どんな存在ですか」と聞きました。その会員の方は、「自助グループです」と答えました。私も「そうだな」と納得しました。学会には、地域や小中高の校種が違う先生や関係者の方々が集まっています。そのような方々からいろいろな情報を得ることができます。また、会員の方は皆カウンセラーとも言えます。「今、こんな問題で困っている」などの相談事にも気軽にのってくれることが多いのです。中野先生も「全国の教育相談研究所の知己を得て、カウンセリングの勉強をさせてもらうことができた」と話されています。その辺が本学会に存在の意味があると思いました。

最後に、先生は、「教師の生き方は初任校でできる」と話されています。「初任校で、生徒指導に悩んでいることを生徒指導部長に相談したことを契機にカウ

ンセリング研修の機会を得ました。そこで学んだ生徒理解に基づく学級経営の実践を記録にまとめ発表しました。これが自分の人生を変えてくれたと言っても過言ではありません」と話されました。

私（小川）の場合も、全くその通りでした。新採の時に「いじめ」問題に遭遇し、その対処に四苦八苦していました。その時に出会ったのは、学会の研修会で指導を受けたロールプレイングでした。早速、学級指導（現在は学級活動）にロールプレイングを取り入れ、「いじめ」問題に対応しました。

その後、不登校、学級崩壊、モンスターペアレントなど、世相を反映するかのように教育問題が出現しました。その度に、学会でいろいろな知己を得て、それに対応することができました。今は、ADHD様愛着障害（愛着障害であるが、その問題行動はADHDの様態）への対応に悩んでいます。

現在の様々な教育問題について、私と同じように、悩む多くの会員に、対応できる学会であり続けてほしいと思います。

（文責：広報委員 小川正人）

【静岡県支部】一支活動報告一

静岡県支部理事長 蔭山 昌弘



ある中学生のカウンセリングを行っていた時のことです。話が一段落したとき、彼が言いました。「おれは、先生から見放されたんだよ」と。「えっ、どういうこと？」と聴くと、「だって、学校ずっと休んでいたら、家に来て、カウンセラーの先生のところに行くようになって。それって、学校の先生から見放されたってことじゃないんですか」と。私は言葉に詰まってしまいました。

不登校や「問題」行動を起こした児童生徒に対して、クラス担任が関わることをやめ、スクールカウンセラーや外部の人に任せることが多々あります。学校現場が忙しくなるにつれ、クラスの生徒にじっくり関わらずに「専門家」に「丸投げ」する傾向が強くなっているように思います。生徒は、自分でも

どうしていいかわからないような苦しみを抱えながら、さらに担任やクラスの人たちから見棄てられていく不安も抱いてしまいます。

一方、教師の立場から言えば、多忙がますます激しくなり、精神疾患による休職者が増えているなど、過酷な勤務状況に追いやられています。そのため「手がかかる」生徒をややもすると「専門家」に任せてしまいたくなるのでしょう。

こうした状況下でスクールカウンセラーとして学校現場に関わる人たちからは、生徒個々への対応よりむしろ先生方への対応に苦慮するとの声をよく聴きます。生徒や保護者と、養護教諭・クラス担任・学年主任・管理職等との間に入って、関係の調整を図りながら生徒に対応していくのは本当に大変な作業です。学校現場での教育経験を積んだ方ならともかく、若くてスクールカウンセラーとして派遣されている方にとっては並大抵の大変さではありません。

スクールカウンセラーとして学校現場に立つ人たちの大変さを受けとめ、対応する力を身につけてもらうための研修機会を増やすとともに、苦慮されている心の内を語り合える場を提供することも必要かと思えます。

子どもたちが充実した学校生活を送ることができるように、教育に関わるすべての人たちがともに手を携えて学び合っていきたいと様々に模索しているところです。

静岡県支部では、毎年3回の研究大会を行い学習や会員個々の実践発表を行っています。

さらに実力養成講座として、3時間講座を年間10講座開設し、支部会員をそれぞれの講師にして学習を行っています。今年度は、東海ブロックの幹事県に当たったため、本部から提案のあった「基礎講座」を、通常の実力養成講座の代替として実施することにしました。2時間1講座を1日3講座行い、3ヵ月で9講座受講できるように設定しました。講師は通年通り、本県支部の会員がそれぞれ担当します。内容は「相談の心得と具体的な進め方」「学校教育相談概論」「認知行動療法の理論と実際」「ピア・メデイエーションの理論と実践」「ソーシャルスキルトレーニングの理論と実際」「精神分析による問題行動の背景分析」「学校臨床でのアタッチメントとトラウマの問題への理解」「発達障害の理解と対応」「教育現場で役立つ様々な方法のエッセンス」です。

本県支部会員は、昨年度新たに4名が加入してくださり74名ですが、若い方々の加入が少ないので、

どのように広めていくのか、この点も模索段階です。

会員の交流をもとに、触れ合い学び合うことが自分自身の血肉になるような活動をめざして、励んでいきたいと思っています。

(文責：静岡県支部理事長 蔭山 昌弘)

第28回岡山大会報告

岡山大会実行委員長（岡山県支部理事長）

藤井 和郎

平成28年8月5～7日に行われました、日本学校教育相談学会第28回総会・研究大会におきましては、全国各地から多数の皆様がご参加くださりありがとうございました。実行委員会では参加目標数を300名としていましたが、それを上回る325名の参加を得て、盛大に開催することができました。また、ワークショップには163名、懇親会には156名の方が参加してくださいました。特に、懇親会は事前申込みだけで会場の定員をはるかに上回ったため、十分な懇親のためのスペースがなかったこと、そして当日受付ができなかったことをお詫び申し上げます。

筑波大学大学院教授の山海嘉之先生の記念講演は、新領域【サイバニクスからの提言】でしたが、学校教育相談に通じる内容が多々あり、たいへん興味深くお聴きすることができました。また、文部科学省初等中等教育局児童生徒課長の坪田知広様のご講演は、私たち学校教育相談に携わる者に力を与えてくださるものでした。坪田様は懇親会にもご参加になり、多くの会員と交流を深めてくださいました。今後の大会でも文部科学省との絆をさらに深めていただきたいと思えます。

最後に、老婆心ながら学会員の皆様をお願いを二件申し上げます。まず、発表申込・原稿・参加申込などの期限を厳守してください。期限を過ぎたら受け付けられないこと、事前参加申込を忘れていたら当日料金になることなどをご理解ください。二つ目は、懇親会の当日受付はあるとは限らないという認識をもってください。スケジュール調整の関係で事前申込みができない方も多いと思いますが、大会準備の立場からお願いを申し上げます。岡山大会へのご参加、ご協力のお礼を申し上げますとともに、次年度以降の実行委員会の運営にご協力をお願いいたします。

夏季ワークショップに参加して

★Cコース 『学習する集団作り』を考える

～協同学習の原理と導入～

講師：高旗 浩志 先生

岡山県支部 木村 悠希

1つの課題に対して、グループになり改善策を考えたと、グループワークを通して、教育課程の面から考えることなど、自分にはない考えを知ることができました。また、自分の授業をふり返ることもできました。

高旗先生のワークショップに参加させていただいて、印象に残っていることとして「話し合い活動」について考えたことがあります。事例を見ながら、その先を予想しましたが、全く考えとは異なる流れになり、どうやったらこうなるのだろうか…と思うことがほとんどでした。後で「よさの背後にある考え方」や「協同について」などを教えていただき、ただの仲良し集団ではなく、時には厳しい追及があっても許しあえる集団にしておくことが大切だということが学ぶことができました。

今の自分のクラスや以前持っていたクラスの様子と照らし合わせながら考えることが多かったのですが、分からないことを安心してひらける支持的風土が保てるようにしていきたいと思います。

★Eコース 「学校教育相談を学級の問題解決に活かす方法と実際」

講師：立命館大学 中村 健 先生

東京支部 大森 雅之

「中学生になった気持ちで参加してください」との中村先生の言葉で、子どもの立場になりアクティビティを体験しました。実際に体験したことで（この活動は何のためにするのか）（ねらいは何か）を考え、参加者の学びを組織するファシリテーターの重要性を再認識することができました。緊張した面持ちだった私や参加者の方々も次第に笑顔になり、初めて出会った方々と気軽に話すことができるようになりました。

午後には、ロジャースの理論をもとに「聴く・訊くを使い分ける体験」をしました。相談者が自己の課題に気づき、整理しながら自ら解決していくことができるように援助することの大切さを学びました。

教育相談の理論と実践を学級・学年・学校の経営に活かし、どのように学校全体の力としていくか、

考えを深める良い時間となりました。

会場の準備や片付け、会の運営をしてくださった岡山の皆様、ありがとうございました。

震災被災者（地）支援委員会報告

1 「工房地球村」と「閑上の記憶」

支援委員会は、今年の3月26日・27日に、宮城県亶理町山元町、名取市閑上地区、富岡駅方面を訪問しました。

最初の訪問地では、亶理郡山元町役場社会福祉協議会（当時相談係）の小泉大輔氏にお話を伺いました。「山元町の死者は636人で、町の人口の約3.8%。障害者の死亡は54名で、障害児の死亡は奇跡的にゼロ。障害のある子どもを抱えながら、自宅が被災し親戚宅に避難したが、親戚宅も余裕がない状況で、人間関係が悪化するなどの例もあった」とのこと。小泉氏は現在、「工房地球村」の運営に携わり、障害のある人やそのご家族の方々と、お菓子作り、カフェ、絵画制作などの活動をされていました。

二日目は、名取市閑上地区のNPO法人「閑上の記憶」を訪問し、案内の方の説明をお聞きしました。「津波によって多くのものを失った『記憶』。それは感情を伴って心の中で大きな場所を占めている。記憶と感情を整理し、心の中に少しでも平穏を取り戻すことで未来へ向けた意欲が出てくる。その人にとって大切な『記憶』を整理するための場所として『閑上の記憶』という名称にした」と述べておられました。

2 向陽小学校における研修支援

宮城県支部理事長の山下克郎先生のご指導、ご協力をいただき、平成28年9月27日に、石巻市立向陽小学校（奥田茂人校長）の「支え合う学級集団づくりのために一構成的グループエンカウンター等を通して」の研修支援を実施いたしました。22名の先生方が参加され、犬塚委員のリードで、バースデーラインを基に5～6人の4グループに分かれて、「サイコロトーク」や「言葉の花束」のエクササイズ、あるいは体験したことを皆の前で感想を述べ合う（シェアリング）などを行いました。

全体の振り返りの中で「普段知っている人でも、今回あらためて知らないことも知ることができてうれしかった」「あったかい雰囲気よかった」「メッセージカードうれしかった」「楽しい経験は子どもたちにも伝えたい」「ちょっとしたことでも褒められて

うれしかった」「楽しさもいろいろあるが、しつとりしたジンワリとした気持ちになれた」などの声をお聞きしました。

研修終了後は個別相談にも応じられることをあらかじめお伝えしたところ、2事例の相談がありました。向陽小学校には、今後10月、11月にも訪問をさせていただき、グループトーク（グループカウンセリングの応用）を実施する予定です。

（文責：支援委員会委員長 砥柄 敬三）



会長コーナー

新任で着任した高校は新設校で、現埼玉支部長の柴崎武宏先生がいらっしゃいました。明日が見えない怒濤の日々の中で、先生は若い教員を相手に教育相談の勉強会を開いてくださいました。もう一つの学びの場は、中村孝太郎先生が開催しておられた埼玉教育相談研究会です。10数名の小さな会には相馬誠一先生や現副会長の鈴木教夫先生がおられ、そうした先生方の姿に刺激を受け、兵庫教育大学大学院に進みました。TA再決断派のMグループの研修会に通い詰めたのもこの頃です。当時の学びは私の軸になっています。

大学院ではブリーフサイコセラピーを日本に初めて紹介した上地安昭先生と出会い、研究に没頭しました。新井肇先生は同じゼミで同期でした。各地でご活躍の先輩・後輩方とも出会いました。これと前後して、本学会の研修委員を拝命しました。やんちゃ坊主で言いたい放題の私を、森川先生、日野先生、中野先生、他界された下司先生をはじめ、諸先生方は温かく見守って下さいました。

こうして振り返ると、私は多くの方々との出会いに恵まれ、今の私になったと思います。そこで学んだことは、「教育相談は与えること」だと言うことです。下司先生が病でやせ衰えながらも最後まで大会運営に当たられていた姿は決して忘れることができません。私がお返しできることは、私がそうした出会いの中で得てきたものを、次につなぐことだと思っています。それが教育相談を生きるということだと思っています。

（文責：会長 栗原 慎二）

事務局より

平成28年8月5日に行われた支部代表者会で、次の方々が多名に推薦され、翌日の総会で承認されました。

- ・名誉会員
藁科 正弘（前静岡県支部理事長）
北原 駿光（前福岡県支部理事長）
瀬名波 榮啓（前沖縄県支部理事長）
川島 克（前宮城県支部理事長）
渡邊 八郎（前神奈川県支部理事長）
藤井 弘（前兵庫県支部理事長）

また、各賞は以下の通りです。

- ・第10回小泉英二記念賞
※該当者なし
- ・第8回学会賞
春日井 敏之（京都府支部）

（文責：事務局長 砥柄 敬三）

第51号編集後記

オリンピックやパラリンピックの報道から、感動や元気をたくさんいただきました。車いすバスケットの選手が「私は、歩けないだけで、その他は皆さんと同じようにできるし楽しんでます。ないものを探すより、あるものやできることを探すことが大切です」と語ったことが強く心に残りました。

「学校教育相談に関わる私たちにできることをあらためて丁寧に見直したい」と強く感じました。

（文責：広報委員長 梅川 康治）

日本学校教育相談学会会報

第51号

平成28年11月20日発行

発行 日本学校教育相談学会

会長 栗原 慎二

編集 日本学校教育相談学会広報委員会
委員長 梅川 康治

事務局 〒179-0073

東京都練馬区田柄3-11-28

日本学校教育相談学会事務局

電話/FAX 03-3926-7386

HP <http://www.jascg.info/>